待宵の名月

夏木 岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
待宵の名月

【Ｎコード】
Ｎ０６４４Ｃ

【作者名】
夏木　岳

【あらすじ】
躁鬱な海、嵐の夏の物語。誰もいないはずの渚で、彼女に出会った。待宵の空には名月、僕は――――

（前書き）

この小説は企画小説「名」の作品です。　名小説　で検索すると、他の方の作品を読むことができます。

僕がこんな人気のない渚にいたのは。
単に現実から逃げ出したから。

「誰だろう」
浜辺の散歩を、海鳴りを背景に美しい女声。それは墓石みたいにつやつやした岩場を越えて来てる。まさかこんな辺鄙なところに若い女の子がいるはずもないと考えもしたけど、歌声は聞こえてるわけで。
僕はなんとなく見てみたいと思った。好奇心か、それは気紛れなのかわからない。でも僕はその滑りそうな表面を行った。
向こうが見えた、かと思えば海原しかなくて。
「きゃあ！」
叫びにはっと見た足下には、薄白の髪の女の子が上半身だけを水面から出していた。
ワンピースのスカートが水中で紫陽花みたいに鮮やかに開いていて。
地球を切り取ったような蒼い瞳。睫毛は整って長く。喩え様のない緻密な肌。それをきれいに裂いた唇。
彼女は、神なのか。
「び、びっくりした」
「……うん」
僕は魅かれるしかなかった。美声に導かれてみれば、彼女に心を奪われてしまって。まばたきも惜しい、一瞬一瞬が大切なもののような。
「ちょっと、聞いてる？」

「あ、ああ。すいません」
なんだか視界だけになって、耳が機能していなかったみたいだ。
彼女はムスッと口を尖らせて、もう一度、と置いてから話し始めた。
「あなた、何？」
「えっと…名前？」
「そうじゃなくて。なんでここにいるの？」
「たまたま……です？」
落ち着いた気でいても、僕の鼓動はドラムみたいに激しくて。恐ろしいものに気圧されているわけでもないのに、しどろもどろ返してる。
はっきりしない僕が気に食わないのか、不服そうにふくれる彼女。いや、そうじゃない、違うものがあるんだ。
「なんで、あなたは、ここに来たのですか？」
岩肌をぱちぱちと叩き、睨みに似たまなざしで僕に問う。答えは僕が来た理由……
「僕は……」

大学でも家庭でも居場所が無くて。学校の成績は一番上、でもって家では押しつけられた養子。良過ぎる頭は誰も理解できない。そんなで近寄りがたいから、友人も数えるほどもいない。
わかってくれた先生もいたけど。初めて信用してもらえたけど、お金に繋がるからでしかなくて。
「嫌になったんだ。なにもかも」
車で県から出て、適当に走って、海が見えたから止めてみて。そうしたら、君の歌が聞こえた、と。
「ははは、僕ってやっぱりたまたま来たんだったんだね」

僕が話したのは僕だ。今ので僕がどんな生き方してきたのか大体わかるはず、似たり寄ったりだって。
「私も、行く当てがないんだ」

彼女は嘲笑うように僕を見た。憂いにも通じるブルーは、どうにも切なくて。
でも僕は、不謹慎だけど少し嬉しかった。同じ者同士、なんて仲間が欲しかった。わかりあえる、お互い共通した苦しみを持つ人と、やっと逢えたんだ。
「私ってば、独りぼっち。誰とも仲良くなれない」
ああ、皆僕を嫌うんだ。あいつは頭がおかしいって。
「人なんて嫌い。大嫌い」
「身勝手だよね。ちょっと違うだけで、僕を物みたいに言うんだ」
「私は化物」
なんだか揺らめいてくる。心が、彼女を濡らしている海のように。こんな傷の晒し合いでも、なんだか救われるんだ。切り刻まれたものの見せ合いが、せめて孤独を埋めてくれる。
彼女と一緒に居たい。
「なんで泣いてるの？」
「初めて共感できたから……」
一筋、二筋と僕の頬を涙が滑る。彼女なら、僕を忌み嫌わない。僕も、そうするつもりもない。
そう思うと、光が見えるんだ。寂しさに蔑んだ僕の世界に。
「ねぇ、私行かなきゃ」
「え？　そんな……」
「ほら、あそこに」
別れはやっぱり来るもの。それはいつでも、突然すぎるほどあっけない。
迎えが来たんだと差す指を延ばすと、大海原と沈む夕陽。船も無ければ、ボートすらない。
視線を彼女に戻せば、いやできるはずもなかった。彼女の姿は、泡のように消えていたから———

数日間、僕は海辺を彷徨った。入り江を覗いた。薄暗い洞穴を照らした。
彼女はいない。
「なんだったんだろ」
潮にやられた喉が、しゃくしゃの紙が擦り合うような音を起てる。
彼女はあの日、煙を手で扇ぐようにあっという間になくなってしまった。私は化物、そうだとすると彼女はお化けかなにかかもしれない。
でも、逢いたい。関係ないんだ、そんなことは。
ただ逢いたいんだ。
だから僕は海辺を彷徨う。入り江を覗く。洞穴を照らす。
「やっぱりいないか」

嵐の日も僕はうろついていた。地元のおじさんに怒られたけど。危ないからって止めても、結局僕はここにいる。
風が体を押し返して、雨が頭を叩いて。視界も良くないし、海は野生生物のように荒れてる。
でもよく考えれば、簡単なことだ。彼女はいない。こんな酷い海に出るのは僕ぐらいだ。
踵を返す、泥の砂浜をかかとが抉ったとき。僕の背中を高波が殴って打ち抜いた。流されて回って、転がって転がって。
咳込む余裕もくれずに、次のが来る。かぶさって飲み込まれて、転がって転がって。
粘つく砂浜に這いつくばり、丸まって苦しむ。肺が痛くて、喉が痛くて。
もう死にそうだよ。いや、本当にそうなるかもしれない。この猛威には勝てないんだ。
僕は壊れかけの体を引き摺って、敵から離れようとした。距離もとったと思う。でもその時には、僕の感覚だけは持ってかれてしま

っていた。

木目の天井。
おろしたてのちょっとかたい布団。
畳。押入、開いた襖。
障子の奥の晴天。
「お気付きですか？」
和服のお婆さんが入ってきた。
強い顔。ぴんと骨のある背筋。
「あんな時化に出るなんて御前さんも馬鹿じゃないのか」
僕が目覚めたのは私営の小ぢんまりした旅館。朝、海の様子を見に来たここの主人に拾われて、今ここにいる。
この女将は手が空いたから僕の様子を見にきたらしい。
「まぁ、生きてただけまだマシだけどねぇ。落ち着くまでゆっくりしな」
ふん、と鼻をならして女将は出ていった。僕をじろりと睨みながら。
なんだか我ながら冒険だったと思う。僕みたいな小心者が、って。
でも、そんな危険を侵してまで探すなんて。いや、見つけるんだ。
もう一度。逢えるその日まで、何度も何度も何度も。

でも、本当にいるんだろうか。彼女は、存在していたんだろうか。
「……出よう」
僕は濡れた財布や壊れた携帯を窓辺に集め、表口へ。
昨日の天気とは打って変わって、コインの表裏のようにがらりと違う。太陽はご機嫌だし、風はお淑やかだし。
気持ちいい陽気な空だけど、やっぱりなんだか怖くて。あれだけのことがあったんだから当然と言えば当然なんだけど。

そんなこんなで気が乗らない僕は、海沿いの道路をゆっくりと歩いて流す。右手には赤い土が丸出しの山の急な斜面。
車はほんのたまに通るけど、それも野菜を積むような大根色のトラックや、ぼろっちい昔の流行車。僕の産地とは違って、ずっと静かだ。

「にーちゃんは、もう大丈夫なんか？」
山の入口らしき鳥居とぶつかると、ひょこひょこと小人みたいなお爺さんが出てきた。
僕を見知ったような言葉。よくよく見ると、色違いだけど女将と同じ名前入りの襷（たすき）で。やっぱりこの人に助けられたみたいだ。
「あ、あの……ありがとうございます」
お爺さんは背中のカゴいっぱいに山菜を採ってて。それでも平気、というか元気だ。さくさく進んでいく。何処へと言うと、来た道を戻ってる。もう少しぶらぶらしたいけど、お爺さんは僕の肩を離さなくて。
「いやぁ、生きてるのは初めて見たわ」
どういう意味だろう。いや、そうそう。女将もだ、こんなこと言ったのは。
「何なんですか？」
「あぁ、あそこで毎年にーちゃんみたいなのが打ち上がるんだわ」
まさか。そんな、僕は曰く付きみたいな所から奇跡的な生還をしたのか。それとも、いつもよりは荒れ方が酷くなかったとか。いや、どうでもいい、死ななかったんだから。
……毎年。
「去年も一昨年もですか？」
「あぁ、おったねぇ。その前の前もずっと」
どういうことだ。

彼女はいる。どこかにいる。必ず。
毎年、季節はバラバラだけど死人が出る。歳はみんな僕ぐらい。誰もが嵐の日なのにそこへ行って、帰らぬ人となった。その人達は、その日までにも何度か砂浜をうろついていたらしい。
僕と同じ。彼女を探していたんじゃないか。変哲のない所を繰り返し散歩なんて、なにか目的がなくちゃできないことだ。
僕はそれでも疑惑に曇る頭を乗っけて、彼女と出会った場所へ向かった。

歌が聞こえる。そうすれば僕は、なんだか胸が熱くなるわけで。
僕は岩場の天辺に座ってた。太陽を天井に置いて、涼しい風に鼻先をくすぐられて。
僕は一人だ。
真理に気付いた哲学者みたいな、僕はただの勘違いやろう。答えがわかれば逢える気がした、ああ、勘違いやろう。
「歌が聞こえれば、すぐ駆け付けるのに」
そうすれば、方角も距離もわかるから。なんて、ああ、泡沫の夢。
実際、僕は半ば諦めかけていた。ここいらをふらふらしながら、潮と孤独に蝕まれてて。
「あなたって馬鹿よね。すごい馬鹿」
――――え？
「あなたを呼ぶための歌じゃないし」
――――そんな、馬鹿な。
「昨日の嵐もそう。あんな荒れてたのに」

耳を疑うのはそれまでにして。目をこするのはいいかげんにして。
彼女は、僕の真ん前にいる。やっぱりワンピース。下半身は水の中、海面と差のない平坦な岩を、教室の机のように両肘をついて。
うう。
「な、なんであなたはそうも泣くのよ」
だって。だって。しかたないよ。こんなにも逢いたかった、逢えなかった。酷い目に遭うだけで。
「だって、逢えたって……」
「そんなに寂しかったの？　弱虫ね」
「ふぇぇぇ……？」
ぼろぼろ涙を零す僕へ、見事な打ち込み。どうも、こんな性格なのかな。泣いてる男の前、ほほ笑みで混ぜて僕に届けます。弱虫、なんてちょっと痛い言葉を。
「ひどくないかなぁ」
「ふふふ、そんなこと言っちゃうのは弱虫だけよ」
「う。ほっといてよ」
手玉だ手玉。僕はぐるぐる回されてる。それもうまい具合にぐーるぐる。
嫌な気は、しないんだけどね。
「でもさ、本当に嬉しかったんだ」
「なにが？」
「君に逢えて」

あの後、僕は「笑顔で恥ずいこと言わないでよ」なんて言われた。その時の照れ具合が予想外で。なんだか、湯気でも上がりそうなくらい赤ーっとして。立場が軽く逆転したことよりも、可愛らしくて、可愛らしくて。ついつい相好（そうごう）は崩れっぱなし。

にこにこした僕が、いやそれとも手玉に取られたのがお気に召さないのか、僕の顔に水をかけて、目を開けるともういなくなってた。
この別れは、一時的。次がある。
確信に近いような自信をお土産に、僕は旅館への帰路を辿っている。

次の日も晴れた。
僕の心も明るい。
「あなたって陽気ねぇ」
だって一人じゃないからね。
「今日は大切な質問もあるし」
そう。昨日聞き損ねた、と言うか気付きさえもしなかったこと。
でも、聞きにくいぞ。いざ尋ねようとすると。
「えっと……」
あんなこと言いながらも、僕はためらってる。どう切り出せば楽だろう。
そうこう考えてると、彼女の細い両手が伸びてきて、僕の頬に触れた。
「ふふふ。あいひ」
「えっ？」
「氷雨娃姫（ひさめあいひ）。わかった？」
どういうことか、まさか、先回りされてるなんて。僕が知りたかったもの。
名前。彼女、ではなんだか距離を感じたままだから。
「ふふふ、驚いた？　私、軽く心が読めるの」
「心を読む？」
「疑わないの」
証拠みせるから、と彼女――娃姫は僕の顔で遊び始めた。指で引

っ張ったり、「ぶー」と、掌で挟んでつぶれ顔とか。
「あっはっははは！」
「こら、遊ばない」
「ふふふ……ごめんね」
天真爛漫な笑顔から一転、きっと、いやからかうような目付きだ。何を言うつもりなんだろう。
「ほんと、かわいいなぁ」
外れじゃない。むしろ当たり。大当たり。おお、読んでるじゃないか。って、多分、誰もがそうやって思うんじゃないか。
「なんだかなぁ」
「あー、なによ。読んだのに」
昨日みたいに、ぷいっとすねた。

暗い日々が、大切になって始まった。
娃姫はいつも僕の前に姿を現した。僕も娃姫に会いに行った。愛らしい娃姫が、日を重ねる毎に愛しくなっていく。
旅館での生活は、金銭面では問題ない。ただ、居心地が悪くなっていく。
娃姫の姿を見られたのだ。
「にーちゃん、悪いことは言わん。あの娘から手を引きぃ」
知り合った人々も、お爺さんも女将も口を揃えて畏怖と憎悪に似た感情を込める。あの娘は「化物」と。
娃姫は違う。そんなのじゃない。そうやって呼ぶから、娃姫が孤独になったんだろ。
ふざけるな。

「娃姫、今度から場所を変えよう」
僕は娃姫が大切だ。なによりも。どれだけ血を流しても、代えるもののない人。
守りたい。人々は何をするのかわかったものじゃない。だから、僕はこの話を持ち出した。
「ねぇ。やっぱり化物、とか言ったんでしょ」
「……うん」
「いや……そんな目で見ないで」
違う。僕は違う。娃姫は娃姫なんだ。
「見てないよ。本当に」
「嘘。いや、いやよ！　やめて！　私に触れないで！」
「娃姫！」
真白い手が、僕の頬を打つ。
駄目だ。駄目だ。拒絶しないで娃姫。
一人にしないで。

海鳴りが轟く。
僕は消えた娃姫を探した。潮騒が咆哮する、敵が再来しても。何度も娃姫の名前を叫んだ。
「お前らなんかに、わかってたまるか！」
人も、嵐も。邪魔だ。
「娃姫、娃姫！」
雨粒は目を塞ぎ、雨音は耳を殺し、暴風が足を掬う。
「あいひ！」
この声は、届いてるんだろうか。
聞いて。大丈夫。僕はずっと味方だから。
「あい、ひ」
頑張っても無駄なんてよくある。でも、それじゃ駄目なんだよ。

頑張っても無駄なら、せめてに娃姫に伝えたいのに。
僕は、高波に、喰われて。
「私って馬鹿よね。本当……」
水中でもがく僕。どんどん飲み込まれて。
もう、今度ばかりは、死んだ。
でも、最後に、泣いてる娃姫が――――

「ねえ、ありがとう」
僕は娃姫に助けられた。砂浜にぐったりと崩れた僕、満身創痍の、虫の息。

「前の嵐の日、ごめんね。君の心を読んだんだ」
そうか。これで二度目なんだね。
「そのときも。私をずっと必要としてくれてありがとう」
そうだ。ずっと君を探したんだ。君だけが、僕を救ってくれるって思ったんだ。
「私を好いてくれて、ありがとう」
うん。好きだ。君が大好きなんだ。
「少しの間だったけど、私とお話ししてくれてありがとう」
これからも、ずっと。僕は君のそばにいるよ。
「でも、ごめんね」
なんで謝るの？
「私、人じゃないの」
ああ、どうでもいい。僕は君が必要なんだ。
「こんな姿見られて、もう一緒にいられないよ」
がっかりしないで。大丈夫、僕は君を愛してる。
だから、やめてよ。行かないで。

「ねぇ。このキスで、お別れ」
娃姫はそっと僕の頬に手をそえて、ゆっくりと、唇を合わせた。
ごうごうと吹き荒れる嵐の中で、一瞬だけ時が止まったような。
「大好き」
離れた顔から、涙が降り注いで。
声も出ない。指すら動かない。誰か、少しでいいから下さい。一言でいいから、娃姫、と呼び止める力を。
行かないで、娃姫……

きりぎりすの演奏、つくつくほうしの歌声。
あの日以来、娃姫は姿を見せなくなった。
娃姫が足を見せなかったのは、僕にも見られたくなかったからで。
娃姫の足は青くて。青くて、鱗とひれのついた足。

待宵の空には名月。
秋の傍には冬。嵐の夜も、夏も過ぎ去った。
それでも僕は、娃姫を待っている。

僕は浦島太郎。
人魚姫に恋をした———

（後書き）

最初は人魚姫っていうタイトルでした。
名前小説だから。名月の時間の経過と、名前をちょいと注意しました。
……うーん、難しいですね。
…アヴリルの２ｎｄアルバム聞きながら書きました（知らん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0644c/

待宵の名月

2010年10月8日15時11分発行